
高校ファイター5

ライデン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校ファイター5

【Zコード】

Z9949C

【作者名】

ライデン

【あらすじ】

ある日、ひょんなきつかけでファイターになつた亮介は、どこかにいると言われるあと4人のファイターを探しつつ、敵と戦ついく。ファイターが5人揃う時は来るのか！？敵がいなくなる時は来るのか！？白熱の戦乱アクション！！

「ふあーあ

あぐびをしたのは松浦亮介マツウラリョウウスケだ。

ここは桜谷高等学校、ごく普通の平凡な高校だ。亮介も超平凡なノーティー天気な少年だった。

クラスのみんなが友達、誰といてもあきない。こんな高校ライフがいつまでも続いて欲しかった。世の中はそんなに甘くないのだが。

*

「りょーすけ！」

クラスメイトが声をかけてきた。

「なんだ？また女子にフられたとかそういうのか！？」

クラスメイトは真っ赤になつた。

「恋してない人に僕の何がわかるってんだよ」怒つて去つていく。

あー。つまんねえ。。。

ちょっと退屈だった。

高校ライフ、もひょつとはじけても良いかもしだ。

楽しいこと好きな亮介はそろそろ高校ライフに飽きて来る頃だった。ちょうどそんなある日のことだったか？

東京のこの地を震撼させる大事件が起こつたのは…

ՀԱՅ

放課後のことだった。

亮介は石蹴りをしながら校門を出た。

石蹴り…子供のやることだよな。
バツカみたい、オレ…

亮介は頭を抱えて一人

「あ～～～」

と叫んでいた。

その声に反応するかのように空が曇った。
真っ黒の雲だ。 本当に本当に漆黒だ。

「おお！！BLACK！！」

ノーナイアにはしゃいでいる間にも、辺りは真夜中のよつに暗くなつた。

「亮介…！バカ…！雨降んぞ…！」

友人たちは走つて家に帰つている。

「…バカはそつちだよ、オレは濡れたいんだ。
亮介は空に手を上げた。

バリバリ…！

いきなり雷が落ちた。

2発、3発。

バリバリバリ！！

4発5発6発。

ただの雷ではない。石垣や建物がどんどん崩れていいく。

「オーマイガーーーッ！！」

亮介は走つて逃げた。

走つて走つて走つてなんぼ。

ドン。何かにぶつかった。

まつ白の服を来たまつ白の女だった。

「おばけーーーっ！！」

亮介は座りこんでお漏らしした。

「お化けではありません」

白の女はにこっと微笑んだ。

「あなたは選ばれた男です」

女が手を差し伸べた。

選ばれた男 ??

亮介は意味を理解できない。しかしどうあえず差し出された手にすがつた。

「さあ来てーーー！」

女に引っ張られ、亮介は猛スピードで走つていく。

「ちょ、ちょっと。選ばれた男つて何ーーー？」

「ファイターです・・・・」

「ふあいたーーー？」

女はこちらを向いて説明を始めた。

「この雷は東京に襲来した魔女によるものです。魔女の名前はテー

ル。

この上ない魔力を持つております、虐殺を何より好みます。
400年前にイタリアで560人が一日で死んだのもデールのし
わざです。

私は聖の女神。

デールを退ける為に、強力なファイターをこの地に作り出そうと
思つてゐるのです。

あなたは、その中の一人です。

」

・・・

魔女を退ける為のファイター！？

それがオレ！？

「何だかわからんねーけど、いいなそれ！！」

「条件を呑んだようですね」

女神は亮介の頭をつかんだ。

Ep3 炎の戦士

女神に頭をつかまれた亮介は一気にファイターの力を脳内に送り込まれていく。

体中に何かがみなぎるような感じだった。

「オレは、ファイターになっちゃうんだあ」

亮介ははしゃいでいる。うんざりの高校ライフよりはちょっとぴり危険なハードファイトも楽しい。

女神の手が頭から離れた。

「これであなたは人間とはかけ離れた能力を持つファイターになりました。」

「うわからビーすんだ！？」

「とりあえず念じれば技を放つことができます。」

念じるのか…

よーし…強くて大きくてドカーンとした技…

ボシュツ…！

手から大きなファイアーボールが飛んだ。

「スッ…」

女神が笑つた。

「これであなたはファイター5の一員です。」

残りの4人を探し、仲良く戦いを共にしてくださいね。」

いつしか雲が晴れた

亮介は公園のベンチにへタレ込んでいた。

手を見つめ何度もシユボツと火を出してみる。

「オレは炎の戦士つてわけか、イカスねえ」

でも、あと4人ファイターがいるつてことかあ」

一人呟いていると、目の前にスース姿の男が現れた。

「松浦亮介とは、あなたのことですね」

「オレの名前知ってるし。なんだいこの怪しーオッサンは。

「はーい。オレ松浦亮介なり、アハハ」

亮介は指先からシユボシユボと火を出しながら答えた。

「戦士にとつて、技をひらけ出す行為は弱点をさらすに等しい。」
男はスースを脱ぎ捨てた。

「ためさせてもらつ、ファイアーファイターよ」

「消防士じゃねーんだぜ、オレは!」

「ファイアーファイター! 消防士

どうやら男はデールの手下か何からしい。
しかし実力は手下にしては弱すぎる。

「えーい、ファイアーパーンチ!」

「ぬをつ!?!?」

男の服が焦げ、太った腹が露出する。

「生意氣な！！会社員風パンチ！！」

会社員風つてどんなだ？ しかもネーミングダサイ上に弱いし。

「ダサイよオツサン！！ 嘰らえ！！トルネードファイアー！！」

亮介の特大火炎放射が炸裂した。

男は無惨に焦げただれて倒れた、絶命した。

亮介はほんのトレーニングになつたと満足し、家に帰つた。

帰路中もシユポシユポと火を出している。

よほどファイターという職業が気に入つたらしいな。

亮介は今は満足だ。

しかし、こんどの敵は会社員風味のダサ男では済まされないかもしない。

つづく

今日は日曜日。しかし、部活はある。
亮介はテニス部だ。ラケット片手にさ

亮介はアーツ部た
ラケット部にさう特訓！！！

「おい。亮介。ちゃんとサーブしろよな。」

「アイムソーリー、ひげそーリー、小泉（！？）そーリー」

亮介は下手くそだ。でも、ムードメーカー的存在なので好かれて
いる。

練習の合間に、指先から炎を出して見る。

やーはあれは夢じゃないんだ
オレは...アライタ!!

そのたびに笑つてごまかした。
アハハ

「あつあとせました——つ！」

終了のあいさつを述べ、みんなは一気に近付いて家に帰る。

カナヘイの小倉

亮介はマクドに直行した！！

六

途中で、よそ見をしていた亮介はもろに誰かにぶつかつた。

「すみません…えつ？？」

ぶつかつた人は亮介と同い年ぐらいの少年だ。
土をはらつていた。座りこんで背中の

何よりも、目がウルウルで今にも泣き出しそうだった。

「ゴメンよー。だから泣かないで。」

亮介は必死だ。

少年は涙目のまま立ち上がった。

「いい所にいたね、亮介君」

はあ！？こいつも俺の名前知ってるし…

会社員の仲間か！？

「君は誰ですかい？」

亮介が尋ねた。少年はウルウルの目を開いて答えた。

「僕は涙目宇留野助。デール様の使いです。」

目から涙がこぼれそうだった。

だつせー名前…。見た目どおりだし。

亮介は色々な思いを隠しながら戦闘態勢に入った。

「オレって有名人！！街歩くだけで狙われる！！」

亮介は調子に乗ってファイアーボールを放つた。

しかし！宇留野助の涙によつてそれは一瞬で消されてしまった。

そして宇留野助の反撃…

「うわああつ」

洪水のような涙に亮介は流され、石垣にまともにぶつかった。

宇留野助は涙を拭きながら笑つた。うれし泣きのように見える。

「なぜ！？ W h a t ！？ 会社員野郎は倒せたのに！？」

「世の中全ての人と同じというわけではないのだ！！」

宇留野助がまた涙を流し出した。

ちよつとやべーんじやないオレ？

涙野郎に負けちゃうヨツ。 つてか水と火は相性悪いね…

何度も流されでは立ち上がり、流されでは立ち上がりをくり返し、亮介は精神的にまいつてきた。

「もういやあ」

そんな弱音を吐いてしまった。

「ファイターになつたなどと、浮かれているからだーー！」

涙野郎が渾身の涙をためはじめた。
あれを喰らえばマジでヤバイ。

ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ。

「松浦亮介人生終止符。連載4回にて終了かーー？」

涙野郎が掛け声と共に大量の涙を放出した。

水、水、水が亮介に迫るツツー！！

「やべーーー！ちよつとオレヤバイーーー！」

亮介は流れ来る水に呑みこまれた。

泳ぎは得意ではない。瞬く間に深くに沈んでいく。つむじと見える街の風景が一あじがむ。

- 3 -

死んじゃつたかな？？

早かつたなあ 16年間。

高校生活で後輩欲しかつたぜ。

亮介は悲しいムードに突入していた。
お葬式の風景などを思い浮かべていた。

死んだら体、冷たくなるんだよな。

え！？

さぶい！！死にそう。 つてか体氷だし！！

亮介はこの世で目覚めた。

体が半分ぐらい氷になつてゐる。

目の前では宇留野助が焦りの表情を見せていた。

「どうしたんだよ涙やろ…」

亮介が絶句した。

パープルの長い髪がなびいている。

やせ型の女が氷で出来た剣を持って立っていた。

「お前何者だ！？」

亮介が希望に満ち溢れて立ち上がった。ハズだが、氷づけなので立てなかつた。

女は無言で亮介を見ると、宇留野助の方に向き直つた。
そして剣で一突き！

「うわあん♪♪」

宇留野助は号泣しながら氷の塊と化した。絶命した。

女は剣を片付け、亮介の方に向き直つた。

「君は誰？ まさかファイター？」
亮介が訪ねた。

しかし、女は無言でただただ亮介の氷を溶かしている。

「聞いてるの！？ 答えてよ。」

亮介が手をブンブン振り回す。それでも女は口をひらかない。

「しゃべれないの？ 口あるの？」

亮介が女の肩をつかんだ。女はその手をサッと振り払つと

「闇風玲衣、立花高校出身。氷の戦士」

とだけ言つた。

玲衣は驚くほど冷たい声だ。しかも無口。これを根暗キャラつて
言つんだつけ。
亮介はちょっとふてくされた。

「じゃあ玲衣って呼ぶよ。同じファイターなんだし、仲良くしな

いとね。」

亮介が差し出した手を、玲衣は軽く握った。

「大伴駅はファイターの集合所。そう奴が決めた。」
玲衣はそう言った。

「奴って？」

亮介はファイターの情報と思って興味深げに聞いたが、玲衣はそれ以上何も話さなかった。

本当に必要最低限のことしかしゃべらない。

変わった子だ…としみじみ感じる亮介であった。

あんたこんだでその日は玲衣と別れた亮介。

学校が終われば毎日駅に通つてやる…早く5人揃つて仲良くなるんだ！！

これが今の目標。

亮介は精一杯目標に向かう…！

早く五人が揃う為に、高校ファイター5になる為に…！

つづく

キーンコーンカーンコーン
聞きなれた学校のチャイムがなつた。

今日は船宿もないし！

亮介は走つて玲衣いわくファイターの集合所、大伴駅に行つた。しかし。大事なことを忘れていたようだ。

「しまつた――玲衣の学校は部活じやん――」

そし、玲衣の学校は語活動の真っ最中

「あ……まあ、他のファイターが来るかもしれないし。」
プラス思考に考えて見たが、他のファイターはこの集合場所を知らないかもしない。
玲衣が言つていた“奴”と言うのが誰かもわからない。
奴＝ファイターとは限らないのだった。

亮介は駅のホームの椅子に座つて寝ていた。

z
z
z
:
:

「 せひ 」

亮介は顔に冷たいものを感じて飛び起きた。
玲衣の氷だった。

「脅かすなよ~」

玲衣は笑いもせずに黙つて立つてている。

「部活だつたの？何部？」

亮介は明るいが、玲衣はと・に・か・く・暗い。

この問いにも、背中に背負つた大きいものを指さずだけの答えだつた。

「ギター？？軽音楽やつてる？もしかして…」

玲衣は「クリとうなづいた。

何分か一人並んで椅子に座つていた。
もちろん静かで少々怪しくも見える。

「？」

玲衣が亮介の肩をたたいた。

無言で何かを差し出した。

リストバンドだ。炎の柄が入つてている。

「すつ・げー！-どーもサンキュー」

玲衣はやつぱり笑いもせず、自分の手首を見せた。

氷柄入りのリストバンドがついてあつた。

玲衣のお手製に見えた。

結局、今日の一人はリストバンドをプレゼントするだけで別れることにした。

2人とも行く方向は同じだ。途中まではいつしょに帰る事にした。
平和な一日が終わろうとしていた…が…

*

前に現れたのは多くの武器を持つた男だつた。

「ファイター？？」

亮介ははしゃいでいた。

「違う、あれは敵…」

本日初めての玲衣の発言であった。

そんなどよつ。敵だつて？？

「闇風…？マヂかよー、ウゼエ」

男が呟いた。

玲衣はそいつを睨み、氷の剣をかまえた。

つづく

武器を持つた敵と思われる男は、玲衣と顔見知りだった。

「玲衣。あれ誰？？どんな人？？」

亮介は好奇心旺盛だ。 しかし！玲衣は何も言わない。

「なんか言つてるぜ。そのウザイ男子。」

男は偉く上からの物言いだ。 亮介は頭に来た。

「なんか言つてんのはお前のほうだろーー誰だいお前ーー」

男はため息をついている。

「あー、やっぱあんたもウザイわ。 それにしても、闇風がファイターだつたなんて、意外！」

玲衣の表情がさらにキツくなる。

やべー。

玲衣がキレル。 怖そう…

「人は見かけで判断するものではない。 それだけのこと」

玲衣はクールで冷静だ。 キレル心配には及ばなさそうだ。

「やっぱ闇風ウザイ。 で、どうなの。今はオレ以外にいるの？」

そーゆー奴

「…」

玲衣は黙り込んだ。 いつもに戻った。

「だから誰ー？お前オレの」とほつとつてゐるじやんーーシカトかよ

ー。

「あーウゼエウゼエ。 ちょっと黙りつぜ」

「名乗れってばーー」

「あ～わかった。名乗るよ。にしても、バリウザイ。」

ウザイ、ウザイ 口癖のようだ。

「オレ、中2のころ闇風と同じクラスだつた僕須勇太。ボクスゴウタ はい、名乗つたよ。だから静かに待つとけよ。」

「いいや、待てない！！ もうき言つたそーゆー奴とはビーゆー奴だ？」

「え～。闇風に聞いて。言うのもウザイから。」

亮介は玲衣を見た。 玲衣の口が開いた。

「愛した人…」

玲衣が呟いた。

「人生の中で唯一愛した人。今もそれは変わらない。敵になつても

…」
グスツ…

無表情の玲衣が泣き出した。 美しかった、ビーでもいい事だけど

…。

「ウザイ…。お前はいつもそつだ。 泣き落とし玲衣をんつて、みんな言つてた。」

「嘘つけ！！ ただでさえ暗い玲衣が泣き落としづつかりするわけない…！」

「昔は明るかつたんだぜ、闇風。ストーカーされて、マジウザかつた。」

「そんな…！？」

亮介はもう言い返すことあきらめた。

自分よりも勇太の方が大分玲衣の事を知つてゐるだらうから。

*

とりあえず、玲衣は泣いていて戦えない。

亮介一人で多数の武器を持ったウザウザ野郎と戦わねばならない。

亮介は指先から炎を出し、勇太に迫った！！

つづく

「ファイアーパーンチ」

亮介は勇太に向かつた。今まで以上に大きな炎だ。

「へえー。あんたは炎か。」

「ああ。でもそんなの関係ねえ」

どこかで聞いたようなセリフをいいながらファイアーパーンチをふりかけた。

「サイバーシックル」

勇太は鋭い鎌をふつた。

ズパッと、腕が裂ける鈍い音がした。

「うわあ」

手の甲を切り裂かれた亮介は思わず座りこんだ。血がドクドクと出ている。

「ウゼエ奴一人一旦中断! ジャあ次は闇風か」

勇太が玲衣の前に来た。

「あつれー? チヤンスだと思つたら、もう泣いてないんだあ」

玲衣の顔をのぞきこんで言つた。

「じゃあ、バイQ」

勇太の大きな鎌が振り落とされた。

カチーン

「…」

玲衣の背中から生えた大きな氷の翼が、鎌を捕らえていた。

「ウゼ ッ てめえ氷かよー」

勇太は不満そうな顔で鎌を抜いた。

「でも、スキありすぎ」

勇太は鎌を大針に持ち直すと、瞬く間に玲衣を貫いた。

「玲衣イー ッ」

亮介の声が響いた。

玲衣は血を流して倒れた。
「は～。やっぱウザイ。最後の最後に針を折りやがった。もう使え
ねえや」

勇太は折れた針を床に突き刺した。

「ファイアーウェーブ！！」

勇太が後ろを向いている所に、うまく奇襲をかけた。
勇太もさすがに驚いた。 が、しかし：

「甘いよ～。それじゃ勝てないね、オレには」
大きな盾に身を包んだ勇太は、不気味に笑っていた。

「オレは武器使いだよ～。盾を持つてた当たり前、アハハ」

勇太は武器を直すと、剣に持ちかえた。

そこから亮介と勇太の戦いは何分間も続いた。
どちらも勝るとも劣らない白熱ファイトであった。

「ううっ…」

亮介が片膝をついた。 疲れが襲つてきたのだるう。
この機を勇太が見逃すはずはない。

「ふうん。チャンスなんじやない？オレエエツ～！」

勇太の剣が振り落とされるツツ…！！

つづく

勇太の剣がものすごい勢いで亮介めがけて振り下ろされる。風の唸りと心臓の鼓動が、耳に聞こえるほど大きな音になった。

「つ…わああっ！」

亮介が目をつむった。

やベエオレ また死にそうだ

前の玲衣の時みたいに、救世主が来たりしないかな。

ピキ ン…

世の中は少し甘かった。

亮介はまた救われたのだ。

剣は凍り、折れた。玲衣が一いち方に手を伸ばして息を切らしている。

勇太は表情を笑った状態のまま固まらせた。

無惨に折れた剣を見つめたあと、そのまま首だけ回転させた。

「闇風エ… あんたさあ」

勇太は恐ろしく笑っている。

玲衣の表情に焦りが見られた。

「ほんつと ウザイ」

ビュン…と言う音がしたかと思ったら、一瞬で玲衣は刺し貫かれていた。

「オレの事好きなくせに邪魔するんだね？ 本当オレにとつて都合悪いことしかない、あんた。」

玲衣を貫いたのは、さつきのよつた細い針ではなく、大きなブレードだ。

「……」

玲衣はやはり言葉を出さない。いや、出せない。

肺より少し上の鎖骨らへんの所を刺され、無惨にぐつたりしている。
「きっと闇風の事だからまだ死なないんだよね。しつこいねあんた。

」

勇太は満足そうに玲衣を眺めてから亮介の方に行つた。

「お前許せない。ちょっと許せない。ちょっとビビりじゃないくら
い許せないよ！」

亮介が少し意味の分からぬことを言いながら立ち上がつた。

「ファイター、揃つてないんだよね？」

唐突に勇太がそう聞いた。亮介は答える。

「そうだけど、そんなの関係ねえじゃん。」

勇太は笑つた。

「いい事教えてやるよ。あんたの知らないファイターの事。」

「知らないファイター？誰だよそれ！！」

亮介は思いつきり興味深々だ。さつきは関係ねえつて言つたくせ
に：

しかし勇太は答えず、妙な金具を持つて飛びかかってきた。

「え！？ そんなのアリ！？」

亮介は地面に拘束された。完全にスキを突かれたのだ。

「ずるいぞ～。ずるい～～」

子供のように叫ぶ亮介を見て、勇太は少々呆れた。

「勘違いすんな。スキを突かれないよう拘束しただけだ。話はす
る。」

勇太は剣を地面に置いて話をはじめた。

「かなり強い風のファイターが現れたようだ…。」

「…風の…ファイター」

亮介が目を見開いた。

つづくよ

「炎のファイターがお前なように、風のファイターもいるんだよ。勇太はもつたいぶるのが上手い。亮介はイライラして來た。」

「で、風のファイターがどうしたんだよ！」

勇太は何秒か黙つてクスクス笑つた。

「すつづー強いらしいな。アハハ……」

勇太が真顔に戻つた。

亮介は啞然とした。

「そんだけ？」

「もちろん、そんだけ。」

勇太が意地悪そうに笑つた。

「そんだけのためにオレの見動き止めてまで話したの！？」

「ああ、お前すぐ騙されるから面白いんだよ」

勇太がワハハと笑つた。そして拘束をといた。

亮介が立ち上がりて腕をブンブン振り回した。

「まあ、風の奴倒したら鼻が高いけど、お前倒したつて嬉しくないし……。」

亮介がカンカンに怒る。勇太が亮介をチラ見しながら

「まあ、オレの目標は遙か高みに向いているからね」と付け加えた。

*

亮介がなにげに炎を放出した。

「よし、再開しようよ、戦い…」

指先から炎を出し、真顔で勇太に向かった。

勇太も負けずに剣を振った。

玲衣は今度こそ失神している。

もう救世主は現れないという中で、亮介は必死に戦った。

しかし… 勇太は強かつた。

「わあっ」

亮介は吹き飛ばされ、もろに壇にぶち当たった。頭から流血する。それでもめげずにファイアーボールを発射する…が、勇太の盾に跳ね返されてしまうのだった。

「しつこいねえあんた。 オレもイライラして来たよ。」

勇太のセリフを聞いて、亮介はふと思った。

あいつ、イライラしてくると“お前”から“あんた”に変わるんだな。

しかし、それはどうでもいいことだ。

「サイバーソード」

剣が残像を残して大きく振られる。亮介のファイアースラムも焼ききられる。

何度も技を焼き消され、亮介は精神的に参ってしまった。

「オレ、もういいかも…」

そんな弱気なことを言ってしまった。

「アハハ。あんた、正直でいいねえ。」

勇太が武器を持ちかえた。 その時…

驚くヒマさえなかつた。

一瞬何かが目の前に広がつたと思った瞬間、亮介は地面に這いつくばっていた。

レーザーガンを打たれたのだ。

一瞬にして亮介の腹を打ちぬいた。

「カハツ…」

亮介は血を吐いて倒れた。

もう、立ち上がる力さえ残つていなかつた…。

つづく

もう立ち上がる気力さえない…
まだ、決着はついてないのに…

それに引き替え、ウザウザ野郎はまだノーダメージ
勝てるわけねえ…

「やつと終わりイ？まあよくやつたほうじゃない？あんたも」
勇太が生意気に笑つた。

疲れと言つものを全く感じさせなかつた。

負けるの初めてだよ…
つてか、3回しか戦つたことないんだから初めてでも普通だけ
ど…

やつぱり悲しい…

亮介は悔しがつたが、体は言う事を聞かない。
何とか立ち上がつたが、それでも炎を出す力が残つていなかつた。

敗北がこんなに悲しいものだとは思わなかつた。

勇太が憎かつた。自分にこんな屈辱を味わわせた勇太がたまらなく憎かつた。

しかし、それよりももつと、勇太は自分より何倍も強いと言う事を理解してしまつた自分が憎かつた。

亮介は勇太を見つめた。

目があつたのを確認すると、小さく首を振つた。

(オレにとつてお前はもつと後に挑戦すべき敵だつた)

心の中でそう言った。

「アハハ。お前やつぱおもしれ〜。ちょっとウザエけどおもしれ〜。」

勇太は大笑いして亮介の頭をパフパフ叩いた。
亮介はさすがにこの時は悔しかった。 流れる悔し涙を止めること
が出来なかつた。

「悔し涙…素直な奴だな〜お前。その心に免じてお前のウザイ友達
解放してやるよ」

勇太は亮介を微妙な目で見つめながら、玲衣のブレードに手をかけ
た。

ズサツと音を立て、玲衣は地面に落ちた。

亮介は玲衣に駆け寄つた。

意識がない玲衣を軽く撫でていた。

「なあ、オレもう帰るからさ、最後にいいことひとつ教えてやるよ
勇太が亮介に背を向けて話しかけた。

「…また騙すの？」

亮介がふくれた。

「心配すんなよ。次はマジだ。」

勇太は指で自分を指した。

「自慢じゃないけどオレ、『メールの使いの3本指に入るほど』の実力
者なんだ」

勇太は一瞬亮介の方をふりむくと、ひそかに笑つた。

「お前が負けるのは当然だつたわけさ。アハハ、じゃあな」
静かに空へと消えていった。

「3本指…」

亮介は複雑な目で空を見上げた。

そして立ち上がった。 肩に玲衣を抱えて…。

「とりあえず、前向きがベスト！！帰るとするか…！」
わざと明るく振舞つて、つらい気持ちを隠した亮介は、大伴駅へと
歩いて行つた。

つづく

亮介はキズだらけの体で玲衣を抱きながら歩いた。
大伴駅に行くまで、どれほどかかった事だらうか…。

とりあえず、駅についた亮介はホームの椅子の所へ行き、玲衣を寝かせてその隣に座った。
リストバンドを交換した時と同じ席に、あえて座った。

亮介はため息をつく。まだショックが抜けないようだ。
手を目に当てて“あ”と叫んだ。

「どないしはりましてん？ その怪我。誰かとケンカしたんやおまへんやろな？」

いきなり知らないオバチャンに声をかけられた。
そりや高校生の男女が二人で傷だらけでいたら、誰だつて怪しむだろうが…。

「あ～はあ。ちょっと色々あります…ハイ。」

亮介があいまいに答えると、オバチャンは顔をしかめた。

「まあ、近頃の中学生はケツタイやな～。恐いわ～」
それだけ言つて去つていった。

ケツタイかよ…しかも中学生！？失礼な…

それでも、オレらそんなに目立つかな…

それから、何分か経つた。

「うわ～どーしたの君ら」

次は大学生ぐらいの茶髪の「一チヤン」とネーチヤンに声をかけられた。

「ああ。こんな人たちにまで…
なんて答えるよつかな…

「ちょっと事故に会ったんですね…」

亮介が話し終わるや否や「一チヤン」が亮介の頭をぐわしつつかんだ。

「気いつかるよ。高校生は調子乗るとこがあるからな~」

「あ~はあ。スマスマセン…」

「別にオレに謝んなくともいいけど、ちやんとそこにつに謝つとけよ

「あ~はい。では…」

なんか勘違いしてる「一チヤン」と「ネーチヤン」は、そのまま慌てて改札口へと走つていった。

本当…こんな出会いがあるな。
傷ついて得るこもあるのか…

亮介がしみじみしていると玲衣が目を覚ました。

傷はだいぶ氷のパローで治したらしく。こんな事ができるのも「アイター」の特権だ。

「…僕須は…?」

玲衣の貴重な発言が出た。でも、少し悲しげなセリフだ。

「ア~…勝利して、余裕ぶつこいて帰つていい。」

玲衣は何も答えなかつたが、悲しげな目をしていた。

それから、さらに何分か経つた。
そろそろ、家に帰る支度をはじめた時だつた。

「君たち…すごいオーラを感じますねえ」

変な奴に声をかけられた。ついでに言つていることも意味不明だ。

「あの…この傷なら心配には及びませんけど…」

「そんなことを聞いているんじゃありません」

そいつは年こころは亮介と同じくらい。

少し茶色がかつた髪が、きれいにセットされている。手には国語辞典や参考書を持っていて、勉強家と感じる感じだ。

「君達、ファイターでしょう。」

そいつがいきなり聞いて来た。

「え？君もしかして…？？」

「察しがいいですねえ。そう、僕はファイターですよ。かなり率直にバラしましたが。」

そいつが超意外な正体をバラした。インテリでもファイターになれるんだなあと思った。

「僕は倉前隆。クラマエリユウ 湖高校ミスウミコウ 在学中、土のファイターです。」

隆は眼鏡をクイクイッと動かした。

「…闇風玲衣。立花高校、氷のファイター」

玲衣も軽く自己紹介をした。

「玲衣はかなり無口だけど、いいやつだよ。あ！オレは松浦亮介

！…桜谷高校、炎です！！」

亮介は、自己紹介＆玲衣の補足紹介をした。

「よろしくお願ひしますよ。」

隆は2人と軽く握手を交わした。

そして、玲衣からリストバンドをもらつた。

「今日一緒に帰ろうぜ！！」

暗い気持ちだった亮介は、一気に吹っ切れた。

新しい仲間が出来た今、もう恐いものは無い……という感じで……。

つづく

キーンゴーン

立花高校の上品なチャイムが鳴った。

立花高校は勉強に特化した学校で、レベルも都内ではベスト3ぐら
いに入る。

その分、部活動は割と適当気味で、地区大会でもすぐに負けたりす
る。

人付き合いの苦手な玲衣に最適な高校だと見えよう。

玲衣は、この日は部活に顔を出さず、そのまま大伴駅に帰ってきた。
いつもお決まりの椅子に座り、亮介と新しいメンバーの隆を待つ
た。

*

「お待たせ、早かつたですね」

隆が走ってきた。

髪もきれいにセットしてあり、制服もきちんと来て、亮介とはえら
い違ひだった。

「僕は科学部に入っているんですよ。今日も立派に実験をこなして
きました！」

隆は延々と自分の話をした。

玲衣はただコクコクとうなづくだけであった。

*

「遅くなつちつた～、オレの学校部活忙しいから…」

亮介も走ってきた。

隆とは違い、ボサボサの髪に制服は着くずし放題だった。

「だらしない。それで街の人々を救えるんですか？」

「べ、別に服装は関係ねーじやん」

隆と亮介は少しもめた。

それから何分か、3人は駅で和氣藹々としていた。

「わ～松浦、その子彼女！？」

同じクラスの女子が声をかけてきた。

あ～ウザイ奴だ。

リーダー格の女子って何かとウザイからやだ。

「彼女じゃないよ、違う学校の友達。」

「へえ～」

女子は相づちを打つと、亮介に軽く手を振つてどこかへ行つた。

「亮介君。友達が多いですね、楽しい学園生活を送つてそうです。」

亮介が眼鏡クイクイをしながら言つた。

「まあ友達は多いけど、学校はめんどくさいから好きじゃない。」

「そうですか…。まあ僕は受験勉強が忙しいですからね。」

隆は得意げに言つた。

受験勉強つてあんた…。

オレら今年一年生だよ??

亮介は心中で何かを思つていたが、口には出さなかつた。

それからも何分か駅でおしゃべりをしていた3人（2人）…。

しかし…

「君達がファイターだね？」
会社員風の男に声をかけられた。
以前亮介が戦つた男にそつくりだつた。

「誰ですか？」

隆がきくや否や、男は口を大きく膨らました。

「兄さんの仇 ッ！！」

そう叫び、大量の水を吹き出したのだった。

へりく

いきなり大量の水に襲われた3人は逃げるまもなく流された。
亮介の炎は通じない、玲衣の氷も水にとかされる。
隆の技は未だ良くわからない。
どうしたらいいんだ…。

「意外とあっさり行けそうだ、兄さんの仇が取れる」
男は飛び上がって喜んでいた。

「くやしい〜〜」

亮介は叫んで炎を放つたが、水の前にそれは及ばなかった。

「…」

玲衣は氷の盾を作つて応戦するが、すさまじい水に氷さえもとかされてしまう。

男は意外にも強かった。

隆は黙つて見ていた。

助けようともせず、安全な場所でずっと戦いを観戦していた。

「隆！ ふざけんな。お前だけ逃げてんじゃねえ！！」

亮介はキレ気味だが、隆はやはり静かに戦いを見ている。

「お前、聞こえねーのか！！」

亮介が隆の所に走つていった。しかし途中で何かに足をとられてこけた。

玲衣が亮介の足をつかんでいた。

「なにすんだよ玲衣！！あんたはあいつ見てて何も思わないのか？」

玲衣はただ静かに首を振った。

亮介は気に入らないようだが、とにかく戦いに向き直った。

「つまおりやああ——！」

男がまた水を噴き出した。

玲衣が氷の盾を作った。 なんとかそこにもぐり込んで水に耐える。

「あ～もう、水つてムカツク！！」

亮介が赤ちゃんのように叫んでいた。

「そろそろ……」

玲衣がしゃべった（！？）。

後ろから足跡が聞こえたような気がして、亮介は振り返る。

隆が立っていた。 済ました顔で男を見ている。

「残念ですが、あなたの攻略方を見つけましたよ」
静かに言い放った。

亮介が驚いたような目をして「あ～！！」と叫んだ。

「お前隠れてたのは作戦を練るためか！！」

「当たり前じゃないですか！逃げるなんて往生際が悪すぎます」
隆はしゃべりながら、ジエスチャーで玲衣と亮介を遠ざけた。

「攻略方とは、生意気な

男が腕組みをした。

「腕組みをするなんて、生意気なのはそちらです」
隆は言い返しながら、地面に指で絵を書いていく。

「遊んでないで、さつさと私を攻略しろ」

男が腕組みを解除し、腕をぶらぶらさせた。

バキッ

!!

地面に大きなヒビ割れが出来た。

男は瞬く間にそこへ落ちていく。

「そんな！？一瞬で負けるなんて……」

「土のファイター特有の地割れ起こしです……」

隆は拳を突き上げた。

朝日に輝いているように見えた。

*

「それにしても。凄かつたな」

亮介が隆の肩をポンポンと叩いた。

今3人は駅を出てそれぞれの家に帰るつもりしている。

隆は強い。

それは玲衣も亮介も認めた。

それと同時に嫉妬もしたかもしれない。

しかし、同じファイター、高めあうべき。

少しは強いライバルがいても良いかもしね、と2人は思ったの
だった。

つづく

最近は戦いも起こらない。
だいぶ平和な日々が続いている。

「おい！松浦！！」

歴史教師、加藤先生の雷が落ちた。

「…はい？」

亮介は恐る恐るふりむいた。

加藤先生は亮介の歴史問題集を片手に、ヤバイ表情をして立つている。

「バカヤロ　－ツ！！」

亮介はあまりの怒声に凄いリアクションをとつた。クラスメートが爆笑している。

「法隆寺を立てたのが織田信長だとお？こんなもん小学校で習う」とだぞ！」

「ち…違うんですか？」

「全く、どんな勉強法をしどるんだ。聖徳太子にきまつたるだろ？」「クラスメートは大爆笑だ。　亮介は赤くなる。

「いいもん！俺ファイターだから！…」

やすやすと本性をばらしてしまった亮介。

しかし、バカのいう事だからと誰も相手にしなかった。

そんなのありえない、冗談だ。

これがまわりの結論だった。

しかし、ただ一人、その意見とは違う意見を持つ人がいた。*

*

下校時刻になつた。

「あ～。織田太子とかど～でも良いじゃんか。歴史なんて畳つてどうなるんだろ」

意味不明すぎる独り言を言いながら亮介はトボトボと歩いた。

「ね～松浦」

いきなり声をかけられた。ふりむくと隣のクラスのギャルが立つていた。

「あの～…君誰でしたっけ？」

亮介が聞いた。ギャルは口を押さえて笑つた。

「マジ～？あたしの事知らないの？バリH～」（非常識）～

一通り笑つてから

「あたし天時歌恋。アマトキカレン松浦に聞きたいことあるんだけど～」

と言つた。

オレこ～ゆー女嫌いなんだよね…

テンションがヤバイつて言つつか…

「あ～はいはい。聞きたい」とつて？

「だるそーじやん。もしか、フランのお？」

「いいから聞きたいことつて？」

「はいはい。今日松浦のクラスの友達に聞いたんだけどさ……あんた
ファイターなんだって？」

「えっ？ …… そうだけど……」

「そう。んじゃバイバイ」

歌恋はそれだけきくと走って去っていった。

亮介は疑いを持った。

「天時の奴……ファイターなんじゃないかな」
考えれば考えるほどムシャクシャする。

「あ～！とりあえず玲衣と隆に相談だ！」

そう心に決めた亮介は走って駅まで行つたのだった。

つづく

亮介は走つて大伴駅に行つた。

…天時歌恋の事を相談しようと…

しかし、大伴駅の事態を知つた亮介は愕然とした。

玲衣も隆も息を切らして何者かと戦つていた。

敵と見られる人は座りこんだ隆の前に立つていて

玲衣は少し離れた所に立つていた。

「玲衣ーーっ！…隆ーーっ！…」

亮介はカバンを置いて走つていった。

「亮介君…」

隆はかなり疲れた様子だ。

「こいつ、とてつもない実力です…」

声にも力が入つていい。

「誰だお前！…」

亮介はその敵の肩をつかんだ。

敵はゆっくり振り向く…

「よー、お久しぶり。でも、あんたの登場シーンウザイね」

亮介は驚いた表情になつた。

それから何秒か黙り込む。

「お前は…」

「オレとの再会がそんなに嬉しいのか？それとも、残念？」

敵がニカツと笑う。

「誰だつけ？」

亮介のアホさに、敵は一瞬首をガクンとさせた。

「オレだよ、勇太だよ。ファイターが増えたって言つから見に来てやつたんだよ」

勇太は少し怒つている。

「あ～。勇太君！！こないだの武器使い！！！」

亮介はやつと思い出した風だった。

そして、戦う姿勢に入つた。

「ファイアーウェーブッ！！」

「サイバーシックル」

だが、さすがに勇太は強すぎる。

デールの使い魔3本指の一人にはどんな技も通用しない。

たちまち、亮介も息が切れてきた。

「ねえ、オレもう帰つていい？」

勇太がつまらなさそうに言う。

「土のファイター見に来ただけだし、戦う予定なかつたし。帰るね」

そう言つとせつと帰ろうとした。

「待つて！」

隆が必死に止めたが、勇太は帰つていく。

「くそー！」

亮介は悔しがつた。

*

「あんた、さつきから見てたけどわあ。怖気づいて逃げたわけ？」

勇太に何者かが話しかけた。

「なんだと。それより、お前は誰だ？」

そいつが手を前に突き出した。

「天時歌恋。雷のファイターなり、アッハッハ

歌恋がピースをした。

「雷の…ファイター…？」

亮介達も歌恋に見入った。

つづく

雷のファイター？

歌恋はピースしていた手を下ろした。

「あんた、自信あるならアタシと勝負してみる？」「得意げにそう言っている。

雷のファイター…

そんなファイターが同じ学校の、しかも隣のクラスにいたなんて…

「あ～あ。せつかく帰れると思つたのに… ウザイのが来ちゃつた。

勇太は武器をかまえた。

「どーやら、やつてくれるみたいね」

歌恋は勇太にウインクしてから、亮介の方に向いた。

「松浦！ あたしの実力見ときなよ！ 絶対惚れるから」

「御託は良いよ、天時さん」

亮介は強がつていたが、内心歌恋のファイトを見たくて仕方なかつた。

「かかつて来なよ、ウザイ野郎」

勇太が挑発した。

歌恋は悪い微笑みをした。

「エレクトリックサンダー…！」

ものすごい、凄すぎる、予想以上の雷が勇太に襲いかかった。

勇太は間一髪これを避ける。

「ライトニングハートツツ！！」

次はハート型をした凄まじい電気。

勇太は背中からまともにくらつてしまつた。

地面に倒れ付す。

「最終！エンドクラッシュ！」

大きな鎌型の雷が猛スピードで襲つてきた。

勇太に激突する。

亮介も玲衣も隆もその戦い振りをただただ眺めていた。
もう、感動で何も言えないのだった。

ヒラリ…

勇太が倒れていた場所に紙が落ちた。

“ウザイウザイあんたウザイ”

そう書かれてあつた。

「逃がしたか…」

歌恋はその紙を電車の線路に投げ捨てた。

それから亮介達の方を見た。

「帰ろう？」

歌恋はそう言つた。

しかし、みんなは無言だった。

歌恋が強すぎたから…

それから各自で帰つて行つた。

亮介は帰路中も一人で思うのであつた。

「風のファイターは、もっと凄いのだろうか」と…

つづく

♪・END・♪

ファイターは4人集まつた。
残るはあと一人、風のファイターだ。
かなり強いと言う噂もある。
みんなその人を心待ちにしていた。

しかし…

「助けて っ」

響いた絶叫。降りしきる血の雨。

亮介は、ただそれを見ていればしかなかつた。
体に出来た大きな裂け目の下には、ズタズタの心臓が覗いていた。
ギヤル風味雷ファイター天時歌恋の最期の時だつた。

天時歌恋 死去
死因 心臓破裂による大出血。

歌恋は、勇太に殺された。

しかし、勇太はその後、不運にも大伴駅の電車に撥ねられ即死した。

不運は、一度起るとなんども続く。

倉前隆 死去

死因 溺死

プールの授業中、髪の毛が排水口に挟まり、溺死した。
悲しすぎた。一度に何人も人が死ぬのは。

闇風玲衣 死去 死因 首吊りによる窒息

仲間が死んでいく苦境に耐えられなかつたのか、自殺をしてしまつたのだ。

そして・・・

「みんな、みんな死んでいくなんてありえないよ」

ドボーン

大きな水しぶきが上がつた。

松浦亮介生存が目撃された最後の瞬間だつた。

ファイター5は絶滅した。

風のファイターを見つける事もできず・・・

その後、地球はテールに支配された。

人々は虫けらのようにあしらわれ、次々と死んでいった。
ファイター5は何も守れなかつた。

最も悲しい、悲しすぎる、少年少女の物語。
これは、この先語られていく、永遠の伝説。
には、なれたのだろうか・・・・・・・・・・・・
・・・この話はノンフィクションです・・・

END

～・END・～（後書き）

もひ、書くことに疲れました。
中途半端す、ぎてすみません。

今まで読んでくださった読者の皆様、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9949c/>

高校ファイター5

2010年10月14日13時27分発行